

位置交換したまゝで一番と同じ動作を行ふ。

ハヤクオハイリ

両手で大きい袋の口を持ちそれを肩にかつぐ様子を重さうにすると同時に左足を強くふみつけ次に右足を強くふ

談話

第一週

お正月について

年始、門松、お飾り等の實際に行はれてゐる時は、まごの幼稚園でもお休みで、一月八日に始る頃は、もうそこにはお正月の何の飾りもないわけである。そこで「お正月について」こいふこの材料を扱ふならば、これから冬の休みにならうとする終りのころ、よく子供に話しておいた方がいゝと思ふ。みんなを集めた時に、それは鼠の餅引を話したあきでもよし、すつかり歸り支度をして先生の挨拶をしづかに待つ、あのさよならの前でもよし。

「もう是だけ寝るこお正月が來ますね、今度は幾つにな

みつける。

フクノカミ

一番と同じ位置交換。

るでせう、誰さんは？、それからあなたは？」

「順々に一人づゝきいて返事をさせる。七つのもあれば六つになる子もあらう。その上で、その六つになる、或は七つになるお正月について、

「お正月には新しい年が來るんですよ。そしてみんな誰でも一つづゝお年がふえて、大きくなるでせう。ですから、そのお祝ひに、まごのお家でも日の丸の旗を出して、御門には松を立てたり、お床の間にもいろゝお飾りをしますよ。みなさんのお家のお飾りをよく見ておいて下さいね。それから、みんなお家の人は大變忙しいんですから、お手傳ひもませうね」

こ子供と約束しておく。こゝろあるお母さんならば、この子供にも出来る何かを見つけてきつゝ一緒に手傳はせるであらう。切つたお餅を運ぶさか、お臺所に人をよびにゆくお使ひさか。

これは幼稚園でもよくあるこゝで、子供相當の仕事があつたら、つゝめて手傳はせたい。大人だけでしてしまふ事は、その用は早く濟むけれど、それで養はれてゆくこゝろの基礎を作る機會を失ふ遺憾が往々ある。先生が粘土板を一人で一度に運ぼうとする時、一寸考へて子供に二三枚づつ持たせたり、植込にはいつた落葉を一つづつ取らせたり、するさ、當人も仕事をしたさいふ、淡いながらもそこに喜びを持つ。

さて、年の暮の支度ばかり書いてゐるが、いよく是からが一月の保育案。つゝこの間の楽しかつたお正月の数々の思ひ出。心にのこつてゐるめいゝの楽しさを話合によつて、一通りみんなのを聞いてやる。この頃になれば組の先生へは發表をしない子は無いであらう、もし何にも云へない子があつたらそれこそお正月であるから、

「二つお年が大きくなつたから、もうお話が出来ますね、それにもうぢき大きい組になるのよ、お話が出来ないで、大きい組になれないさ不可ないでせう、お餅は食べたいの。幾つ？」

なきゝ返事を促す。この時直ぐに效を奏しないでもいゝ。かうして、子供の方の話を聞いてから、次には先生の方からお正月についてのいろいろを話してきかせる。結局この家でも大差のない行事であるから、さの子にさつても、先生の話は、經驗の一つづつを聞いてゐるやうなもので、あゝ、私の家の門にも大きな松を立てた、お床の間にもお飾りをした、お餅も食べた、お正月にはこんな事をするのださいふ、子供の内部におこる朦朧としたこゝろの動きを、先生の話によつて、はつきり整理してゆくのである。

## 第二週

### 國旗の話

年少組では、わが日の丸の旗について多くを語りたい。さには云ふものゝ、幼稚園でこの旗の由来や、尊さを述べるこゝも出来ない。それで次のうたを讀んできかせる。同時

に幾度も繰り返して。

ひのまるのはた くらほし

われらの こつき は

ひのまる の はた

たかく たてよ

たかく たてよ

あさひの いろ を

あかく そめて

あかるい そら に

ひらひら ひら き

かがやく ひかり

ひのまる の はた

たかく たてよ

たかく たてよ

われら の こつき

ひのまる の はた

(コドモノクニ

大正十五年第五卷第一號掲載)

年長組になつたらこれを吟誦させる。

七匹の仔山羊(幼児演出)

幼稚園の庭で或る日こんな事があつた。

「サア、葉つばをたいてき火をしようや」

子供みんなですゞかけの落葉を集める。

「なか／＼火がつかないね」

一人が、持ち出して來た燧石で、カチ／＼やつてゐる。

「こゝでおぎろうよ」

「僕もおぎるよ」

鬼が出て來たミこころらしい。

これは、つい近ごろ、落成祝賀會の折に見せて貰つた劇を、そのまゝ子供が自分達で演じてゐるミこころであつた。このくり返しをしてゐるばかりで別に大して發展するわけでもなく、云はゞあそびで演じてゐるので、劇さまではいひ兼ねるが、かうして、先生の指導なしで、自分達だけで出來得る場面だけを演じて遊んでゐるのであつた。

かうして自分達だけで遊んでゐるのは、まごみに無理が

無くて、面白そうである。けれども、この場合はほんまうに自分達の出来るところだけで終つてしまふ。折かく、かういふ氣持を、演じて見たいその心を、そのまゝ萎ませてしまふのも惜しいと思ふ。そこで、最も演出のし易い七匹の仔山羊を選んで、始めは先生の指導のもまに演じさせて見たのであつた。

この話は六月に一度してあるが、幼児演出するにつき、その日の前日位に再び話をする。始めはやはり先生が中心になつて、ごの役も先生が殆んどするつもりでなければ出来るものでは無い。

「あのね、お話できいたでせう、狼と山羊さんのお話。あれ、みんなでお芝居して見ませう、始め、先生がお母さんになりませうね、誰れがお姉さんにならない」さきいて見るまゝ、申出があるから、順々にきめてゆく。藥屋、粉屋は誰もなりたがる。いろいろの點を考慮して配役を先生が決める。

幼児演出に大事なものは、臺詞を出来るだけ短くして筋を通らせること。時によればどこでもいゝ場合がある。言

葉が長ければ、幼児演出は不可能に終る。先生の演出による人形芝居はこの點は、臺詞が大いにちがふ。

場所 保育室内で、腰かけを一方に寄せて、ひろく場所をきつておく

道具 長椅子

衝立(小)

鉄、段ボールで作つた大きいの

大ふろしき(無地)

手かご 等

七匹の仔山羊連は、長椅子にズラリ腰かけてゐる。お母さん山羊が(先生)この前に立つ。

母「これからお母さんは、町の方にお使に行つて來ますよ。

パンや、バタや、りんごや靴下を買つて來ませうね」

仔「それからお菓子もね」

母「ハイハイ、あゝそうく、忘れてゐた、あのね、お母

さんの留守に山の方から狼が來るかも知れませんよ」

仔「おう怖い」

母「狼のお聲は太いし、お手々は眞黒ですからね、お家へ

入れちやいけませんよ、ちや行つて來ますよ」

仔「行つていらつしやアーい」

お母さんは籠を下げてかくれる。

衝立を仔山羊達の前におく。

狼、衝立のかげにしががむ。太い聲で、

狼「トンく、トンく、お母さんが歸りましたよ」

姉「お母さんはそんなきたない聲ぢやありませんよ」

狼、藥屋（少し離れて椅子に腰かけてゐる）に行つて、藥

をのむ真似する。

狼「トンく、トンく、お母さんが歸りましたよ」

姉「手をお見せ」

狼、衝立の上からニウツツ手を出して見せる。

姉「お母さんのお手々はもつこ白い」

狼、粉屋で粉をぬるまねをする。

「トンく、トンく、お母さんが歸りましたよ」

観 察

一同「ああ嬉しい、お母さんよ」

衝立を横にやる。

狼「ワァーツ」云つて、仔山羊達を追かけ乍ら、狼は一緒に

に室のすみに隠れる。それに大きい風ろしきを被せてお

く。仔山羊一匹だけ長椅子のかげにかくれる。

母山羊歸つて來て、これを見て泣まね。仔山羊ミ大きな

鉢を持つてゆき風呂敷を見つける。鉢で切るまねをする。

中から一匹づつ、お母さん、お母さんミミびつく。

幾度か繰返してゆく中に、先生の手傳ひが無くても、出

來るようになるさいよく面白くなる。なるべくきの子に

も役が當るよう三度位配役をかへて演出する。従つて見物

にまわる多數があるわけで、是等は椅子に腰かけて、靜か

に友達の演出を見物する。あく迄も見せるので無く、遊ぶ

のであるからその意味で。雨の日の室内あそびにぞくい。